

希望への一步



はじめに

文部科学省調査によると、平成１９年度以降、不登校児童生徒数は減少しています。

しかし、全国では約１１万５千人、兵庫県下では約４，９００人（平成２２年度調査）を数え、「不登校」が学校教育上重要な課題の一つになっています。

「不登校」は、家庭、学校、地域社会のそれぞれの要因が複雑に絡み合って起こるものと考えられ、近年、態様も多様化しており、その解決のためには、三者のそれぞれが努力し、緊密に連携し、協力することが不可欠です。

県教育委員会では、平成元年度に「登校拒否等問題研究協議会」を設置して以来、不登校の課題の解決に向けてさまざまな施策を行ってきました。

平成７年度には、教育相談の充実を図るために「ひょうごっ子悩み相談センター」の設置やスクールカウンセラーの派遣などにより、子どもたちの悩みの解消を図るとともに、平成８年９月には、不登校の子どもや保護者を支援するための専用施設「県立但馬やまびこの郷」を開設するなどの取り組みを進めています。

この冊子を参考に、思春期を迎えた子どもたちの心理や不登校について理解を深め、今一度、子どもたちとのふれあいのあり方を考えていただくとともに、子どもたちにとって、健やかで希望にあふれた中学生活になることを願っています。

兵庫県教育委員会

I	新しい中学校生活	2
1	新しい学習	3
2	部活動への参加	4
3	新たな人間関係の形成	5
II	中学生の心とからだ	
1	思春期のからだとの出会い	6
2	自我に目覚めるころ	6
3	性の目覚め	8
4	とまどう大人たち	9
III	不登校の予防と対応	
1	不登校とは	10
2	不登校のサイン	10
3	不登校と家庭生活	11
4	不登校の子どもの心の不安	12
5	不登校の状態	14
6	家庭生活上でみられる状況とその対応	15
IV	家族の役割	
1	すること・しないこと	22
2	「母性性」と「父性性」の歯車	24
3	愛情のかたより	25
4	耳をすませば	26
5	ふりむけば	27
V	家庭と学校の信頼関係	
1	学校との連携	28
2	学校との協力関係	29
VI	相談について	
1	相談しましょう	31
2	相談はどこでできますか？	32
3	相談機関一覧	34

I 新しい中学校生活

さあ、新しい中学校生活のスタートです。

子どもたちは、「部活動は何部に入ろうかな」「勉強はどうか」など期待と不安をいだいて中学校に入学します。

中学校の3年間は、子どもたちが心身ともに急激に変化する時期です。

この心の揺れ動く時期に、子どもたちは自分の可能性を信じて、将来に夢や希望をもって日々成長していくのです。ときには、友人関係や進路のことで悩むこともありますが、それは、豊かな人間性を形成するうえで糧^{かて}となるものです。

近年、子どもたちは遊びを通しての自然体験や生活体験などの機会が減少し、そのことが人間関係の希薄化や社会性の欠如につながっていると指摘されています。自然体験・ボランティア活動・スポーツ・文化活動や地域の行事など、中学校時代にチャレンジできることは無数にあります。友だちと力を合わせてさまざまな体験活動を行うことで、子どもたちに、たくましく生きる力をはぐくみたいものです。

子どもが心豊かな中学校生活を送るにあたって大切なことは、一人一人の個性をかがえのけないものとして尊重し、得意とする分野を豊かに伸ばし、積極的な生き方を身につけるよう、子どもを支援し見守ることでしょう。



1 新しい学習

中学校での学習の中で、特に小学校と違う点について紹介しておきましょう。

(1) 教科担任制

全教科を異なる教師が教えます。小学校のように、学級担任と一日中接するということはほとんどありません。

各教科担任の学習指導のスタイルが異なるので、授業はバラエティーに富んでいる半面、学習スタイルに慣れる必要もあるでしょう。

(2) 英語

「英語」という教科を学習します。はじめて学習する教科なので、学習への意欲づけを大切に、趣味や関心を育てて高めていくことが大切でしょう。

(3) 定期考査

「定期考査」という形での校内一斉テストがあります。小学校の單元ごとのテストではなく、広い範囲について出題されますので、予習と復習も大切になります。

ひとこと

中学生になったので、「さあ、中間テストだ。がんばれ！」
「どの教科もがんばれ」と言いたくなるものです。

しかし、これが、場合によっては大きなストレスとなって、子どもたちに重くのしかかることがあります。

学習の成果を点数や順位のみで判断せず、努力の結果として身に付いた内容に着目し、学習の意欲を向上させるはたらきかけが大切です。



2 部活動への参加

それぞれの学校で開かれている部の数や種類は異なりますが、基本的には運動部系と文化部系に分かれており、自分の希望に基づき入部することになります。

放課後や時には休日に活動するなど通年的な活動であることや、他学年の生徒とともに活動するなど、時間的にも、友人関係においても中学校生活の中で大きなウェートを占めます。

部活動を一つの集団社会として

- ◎ 全部員が協力して同じ目標に向かって日々活動するので、自己の価値観が少しずつ明確になります。
- ◎ 異なる年齢の集団における健全な人間関係をはぐくむので、社会性の発達において、大変重要な意味があります。

しかし、部活動やそれにかかわる対人関係などによるストレスから、精神的に不安定になることもありますので、学校と家庭がしっかり連携して、望ましい部活動の在り方を考えていくことが重要であるといえるでしょう。



3 新たな人間関係の形成

(1) 思春期の人間関係

中学校生活での心理的不安の要因には、身体的変化によるものや学習・進路などがありますが、友人（対人）関係、集団での自分の位置の変化、周囲からの期待などに起因するストレスが思春期の子どもたちにのしかかってくることもあります。

いろいろな仲間との出会いは、混乱をもたらすこともありますが、新たな交友関係を通して人間関係を深めるなど、思春期において大変重要だといえるでしょう。

友人関係はとても大切

- ◎ 安心感・・・・・・・・・・友人に悩みや不安を語ることで心理的に落ち着く。
- ◎ 自己を見つめる・・・・・・・・友人関係の中で自己を省みる。
- ◎ 対人関係を学ぶ・・・・・・・・協力や葛藤^{かつとう}を通して思いやりの心を知る。

(2) 教師との人間関係

学校生活の中で、友人との人間関係とともに大切なのが、教師との適切な人間関係です。小学校と比べて一般的な違いを紹介しておきましょう。

- ◎ 教科担任制なので、毎日複数の教師との人間関係が存在します。
- ◎ 部活動の指導者との人間関係も重要な意味を持ちます。
- ◎ 価値観が形成されつつある時期と認識して、教師も生徒と接することが多くなります。
- ◎ 人生の先輩として、生き方や進路についてのアドバイスもします。

Ⅱ 中学生の心とからだ

1 思春期のからだとの出会い

(1) 親の背を追い越して

小学校の高学年から中学生の時期は、身長が伸び体重が増えるなど、からだが大きくなります。いつの間にか、親と同じ背丈になったり、追い越したりもします。そして、体力面でも発達して親に追いついてきます。

(2) からだと心のズレ

思春期のからだの変化は、子どもから大人への変化を意味しています。この変化は心にも影響しているのです。

自分のからだの変化に気づくことは、自分自身に気づくことです。「自我の目覚め」といわれ、これまでの自分とは違う自分に気づき、深く自分のことを考えるようになります。

保護者にとっては、子どもの成長を喜びながらも、手元から離れていく寂しさを感じる時なのです。

からだの発達と心の発達とは、ズレのあるのが普通です。この点を理解して、温かく見守りながら、適切な助言をすることが大切です。

2 自我に目覚めるころ

「自分とは何だろう」というように自分に対して疑問を持ち始めます。

「意気地がない」「弱い」など自分を否定的に見たり、また逆に、自分の力を過信したり、心の中に自分を評価したり励ましたりする、もう一人の自分があらわれたりします。

自分の心の中にある強さや明るさ、優しさ、そして弱さや暗さ、意地の悪さなど、そのような矛盾に満ちた自分自身の姿に気づきながらも、自分を受け入れなければなりません。自分を正しく理解できれば、自分なりの考え方、生き方や目標を持つことができるようになります。

(1)「ほっといて！ でも、見捨てないで！」～自立と不安～

思春期になると、興味関心や行動範囲の拡大にともない、家庭以外の世界にも目が大きく開かれていきます。依存心を持ちながらも、保護や干渉から逃れたいという気持ちが芽ばえてきます。こうしていわゆる自立が始まるのです。



「決断したくてもそんな力はまだない……」

自立へのもがきは、自分自身との闘いでしょう。

自分が「一人であること」をまだ認めたくはないし、「親はいつだって自分を守ってくれる」と思いたいのです。

心の深いところで、親に感謝したり頼っていても、安易にそれを認めようとはしません。

「ほっといて！ でも、まだ見捨てないで！」なのです。

(2)「友だちが大切」～友人関係～

思春期には、これまでの親や大人に代わる新たな仲間関係を求めます。友人に自分のからだの悩み、異性への思い、勉強や進路に対する不安や悩みをうち明けることにより安心感を得ます。また、友人関係の中で自己を客観的に見つめることができます。

友人関係においては、楽しいことやうれしいことばかりでなく、つらいことやトラブルもあります。友人の優しさや思いやりの気持ちを感じたり、あるいは傷つけたり傷つけられたりすることもあります。

クラスや部活動における友人関係の中で、たわいない話、悩みや不安を語り合うことがとても大切なのです。

それらを通して、人間としての善悪の判断や、人に対する思いやりの心などを学んでいきます。

(3)「恋」～異性への関心～

思春期になると、性の意識や異性への関心が強くなります。異性とつきあってみたいとか、好きな異性のことで頭がいっぱいになるなど恋愛に関して悩んだりします。

人を好きになるのはごく自然なことです。うれしさや楽しさ、切なさや恥ずかしさ、苦しみや心の痛みを経験することで、人にやさしくしたり思いやりの心を持つことができるようになるのです。

異性との交際を経験する中学生もいます。子どもたちの異性への関心を、大人として温かく受け入れながらも、子どもたちがお互いに信頼感を持ち、相手のことを考えて行動できるよう見守ることが大切です。

3 性の目覚め

(1) 性的成熟

思春期には、第2次性徴があらわれ、性毛や脇毛が発毛し、女子では、胸が膨らみ、生理が始まり、体つきが丸みを帯びるようになります。また、男子では、声変わりや精通がみられ、体つきは筋肉質になってきます。

今の中学生は、親の世代が中学生だったころと比べると、体格は大きくなり性的成熟も早くなっています。ところが、この性徴には個人差があり、他の人より遅いのか早いのか、同じなのか違うのかなど不安や悩みを生じることが多いのです。

(2) 性の商品化

情報化社会といわれる今日、携帯電話、メール通信、インターネット、PHSなど、あらゆる通信手段や媒体を通して情報が飛び交い、中学生は無防備なままそのような世界に投げ出されることがあります。

好奇心と衝動、それに金銭が絡まり、性が商品化されることがあります。

性は一人一人の人間にとって、とても大切なものです。性は、その人自身の人格をあらわし、その人の生き方をあらわすものなのです。自分自身を大切にすることを、大人は子どもたちに教える必要があります。

4 とまどう大人たち

(1) 親離れ ～大人への第一歩～

「親がわかってくれない」という言葉には、「親とは別でいたい」という気持ちと同時に「親に認めてほしい」という二つの叫びが含まれています。

中学生になると、「理解してもらいたい」という願いを持つようになります。また、同時に、幼児期同様、困ったときはいつでも帰ってこられる安全基地としての、親の存在を求めています。親離れをしつつ、親の愛情を欲しがるときなのです。

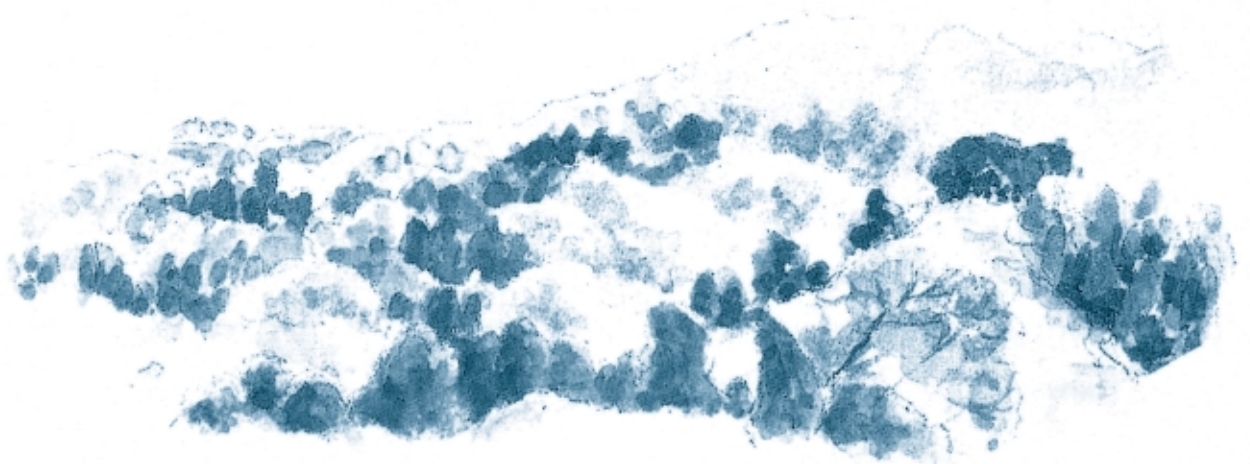
大人への第一歩を踏み出した子どもを、温かく注意深く見守っていくことが大切でしょう。

(2) 親のあり方 ～思春期の中学生と生きる～

子どもの心は、独立と依存という相反する欲求のはざまで揺れています。

子どもが危険な状況に陥ったり、アドバイスを求めてきたり、親の力を試すことを望んできたときは、子どもと真摯^{しんし}に向かい合う姿勢が必要でしょう。

親と子どもの間は、つかず離れずの適当な関係をつくっていくことが大切なのです。



Ⅲ 不登校の予防と対応

1 不登校とは

不登校とは、一言で言うと学校に行けない、行かない状態を言います。現在元気に登校している生徒もさまざまな要因が作用して、不登校に陥る可能性を持っているという認識を持つことが大切です。つまり、不登校はあらかじめ予測された子どもだけに起きるものでなく、「学校に行きたくない」と思う気持ちはだれでも持っているため、一時的なものを含めると、いつ不登校が起きても不思議ではありません。

2 不登校のサイン

不登校になる前にはそのサインを出すことが多少あります。それらのサインを見落とさないよう、生活の様子の変化をしっかりと^{とら}えておきましょう。

子どもが示すサイン

- 1 朝方になると、元気がなくなり、口数が少なくなります。
- 2 朝方に、頭痛、腹痛、吐き気、下痢、発熱などを訴えます。
- 3 朝方になると、機嫌が悪く怒りっぽくなります。
- 4 朝方、布団にもぐって起床しなくなります。
- 5 朝方になると、行動がスローペース（緩慢）になります。
- 6 特に長い休暇や病欠の後、登校したがりなくなります。
- 7 母親などへの甘えが強くなります。
- 8 学校での苦情や不満をよく訴えるようになります。

思春期特有の、自分の弱みを見せることが苦手ながんばり屋タイプの子どもは、兆候が見過ごされやすく、不登校がいかにも突然に起きたように感じられ、周囲をとまどわせることがあります。

3 不登校と家庭生活

(1) 生活の変化

現在、私たちを取り巻いている社会は、24時間営業の店がいたるところにあるなど、近年大きく様変わりしました。生活様式も大きく変化しました。そのため、生活時間が夜型に移行し、朝起きることができなくなっている子どももいます。

(2) 価値観の変化

最近では、3Kと言って「きたない」「きつい」「きけん」な仕事を避ける傾向があるといわれています。社会全体に「できるだけ苦勞を避けて楽に生きたい」というライフスタイルの風潮があり、子どもたちもその影響を受けています。

「学校」そのものに対する考え方も大きく変化してきました。子どものころ、「今日は何となく学校を休みたいなあ」と思って、じっと布団の中で眠っていて、家族が「今日は学校へ行かんのか!」とすごい剣幕で怒鳴り、布団をはがされ驚いて反射的にはね起き、しぶしぶ登校したという経験をされた方も多いと思います。いい悪いは別に、学校に対して「学校は何が何でも行くべきところ」というのが、その時代に生きてきた多くの親たちの学校観でした。

現在では、ややもすると、子どもの希望や個性よりも自分の考えを先行させ、過保護・過干渉になりがちです。子どもが自分の意志で何かを選びチャレンジしようとしても、待つことができない親はつい手をだし、子どもの自立の芽を摘み取ってしまうこともあるのです。



4 不登校の子どもの心の不安

思春期の子どもの心の動きを述べてみましょう。

- ◆ 心よりからだは先に大人になってしまい、自分の気持ちをうまく処理できなくなる時があります。
- ◆ 「大人になったときの自分が知りたい」と言って悩み始めます。
- ◆ 「勉強なんて、社会に出て何の役に立つの」と保護者にくってかかる時があります。
- ◆ 自分の容姿が気になり、人前に出られなくなることがあります。
- ◆ 人が私を悪く思っているのではないかと悩み始めたり、他人の評価が気になったりします。
- ◆ 精神的に不安定になり、気にさわると「荒れ」たりします。
- ◆ 小さいときから活発でがんばり屋だったのに、「黒板の字が見えない」と不満をぶつけるなどイライラし始めます。
- ◆ もう中学生だというのに、小さな子どものように母親のひざに乗ったり、時には胸に触ったりと甘えることがあります。
- ◆ 人から指導されたり、指示されたりするのを嫌います。自分でやってみて、うまくいかず困った時には親身になってくれる人に依存するようです。

では、このような子どもたちが不登校になったとき、どうかかわればいいのかでしょう。

不登校の子どもたちは、他人の目や言動が気になったり、人の評価をものすごく気にするようになります。

そういうときは、しかったり意見をしたりするのではなく、しっかり受け止めて「おまえを信頼しているよ。安心しなさい」というメッセージを送りましょう。時には、ゆったりと大きなふところに包み込むことも大切です。

親にしてみれば、小学校のころは素直であった子どもが、反発や反抗をするようになりとまどいます。

そのときは、中途半端な気持ちで接するのではなく、逃げないでしっかり守っているという姿勢をくずさないで、子どもとひざをつき合わせて話をしてみましょう。

子どもたちは「自分を理解してくれている」と感じることで、少しは先が見えはじめ、登校へ向けて自ら努力することができるようになります。

こんな例があります

「家庭ではCDばかり聞いて楽しんでいる」と言う親がいます。子どもに聞くと「学校での話題についていくため、必死になってCDを聞いている」という具合に違いがでてくるのです。

中学生のころの人間関係は、当の子どもが一番よく知っているはずなのに母親がそれに介入しようとして、子どもの反発や反抗にあうこともあります。

思春期まっただ中の子どもたちは、すべてのことをうっとうしく感じたり、つまらないことに腹を立てたり、そんな自分に素直になれなくて、そのことでまた落ち込んでしまったりと、心情が日々変化していき、その状態についていけずイライラしたり、一番身近な母親に当たったりします。

CDを聞いたり、テレビを見るのも、子どもたちの人間関係をつくっていく上で大切なことなのです。



5 不登校の状態

- ◆ 1年生の半ばに転校後、友だちからいじめられたのがきっかけとなり、2年生になってすぐ欠席し始めました。
- ◆ 集団にとけ込むのが苦手で、よく腹痛や頭痛を訴えて保健室に行ったり、早退していましたが、しだいに学校を休むようになりました。
- ◆ 内気で神経質な面があり、小学校時代から不登校の傾向がありましたが、中学校に入学してからも休んでいます。
- ◆ 小学校以来、花形スターでしたが、“よい子”息切れのようになり、休み始めました。
- ◆ 不登校を克服するために転校しましたが、遅刻早退が多く、今も断続的に休んでいます。
- ◆ 親から期待され、本人も努力していましたが、テストの結果が思ったほどよくありませんでした。このことをきっかけに、教室に入ることができなくなり、保健室登校をしていましたが、だんだん休みだしました。
- ◆ 部活動で、先輩や同級生とのトラブルが起き、自分で解決できず、部活動に参加しにくくなり、しだいに学校にも行けなくなりました。

では、このような子どもたちに、どうかかわればいいのでしょうか

不登校の原因が、学校生活に起因すると考えられる場合、学校での様子を知ることが大切です。そのためにも、まず担任など学校と相談するようにしましょう。

【転校を考えることは】

中学生になってさまざまな形で不登校を経験してきた子どもたちが、その状態から一歩抜け出す意味で転校を考えることがあります。

ただ単に環境を変えることにより好転する場合もありますが、一時的には登校できても、不登校の状態に戻る場合が多いようです。

当の本人にとっては、転校することによって、逆に大きなプレッシャーになっているのです。新しい友だちをつくり直していく作業を自分なりにしなければなりませんし、今までの失敗を繰り返さないように、ずいぶん気をつかって生活するようになります。

【部活動においては】

先輩や同級生との人間関係のもつれからくることが多いため、子どもたちは大変悩みます。その子どもにとって信頼できる大人（部活動の顧問、担任、養護教諭など）がいるという状況にしたいものです。

また、同じ部活動の友人たちの力を借りる方法もあります。困っていることや悩みは、一人で抱え込まないで相談することが大切です。

3 家庭生活でみられる状況とその対応

Q1 朝になると必ず

床につく前に「明日は学校に行く」と言って準備をするのですが、朝になると身体症状を訴えます。医者に見せても異常はありません。

このような症状をどう考えたらいいのでしょうか？

○ 身体症状の意味

就寝前には学校に行くと言って準備をするのですから、「学校へ行く必要性」は分かっています。しかし、何らかの事情で学校に対する不安を長期にわたって持っており、学校に強い抵抗感があります。

つまり、子どもの心の中に「行きたいけど行けない」という相反する事態が存在しているため、解決が難しいと考えられます。しかも、その事態が本人にとって時間的に差し迫ってくると、身体症状が強くあらわれてくるのが特徴です。

医師に見せるという状況は、子どもにとっては次の四つの場面が考えられます。

- ① 登校できない原因を明らかにして、治療により登校できるようにしたい。
- ② 登校できないでいる苦しい状況を、周囲の人たちに納得してもらう証明をしてもらいたい。
- ③ とりあえず登校しなくてもよい合理的な理由を見つけない。
- ④ 依存性が強く、医療機関に頼る気持ちがある。



このような状況にいる子どもは、展望が持てないという特徴があります。そして当座の苦しみからいかにして逃れるか、どのようにして合理的な解決を図るかということに苦心している状態でしょう。

心理的な緊張をほぐし、恐れや不安の状況を把握するなど、安心できる状況（雰囲気）をつくる必要があります。

Q2 身体症状のとりえ方は

「頭が痛いので学校へ行けない」と訴えるので、相談機関へ行ったところ「不登校に伴う身体症状だ」と言われました。そのとおり信じていいのでしょうか？

○ 不登校と身体症状

不登校の初期症状として頭痛や腹痛などの身体症状を訴えて、医療機関で診察を受ける場合は少なくありません。子どもの場合、精神的葛藤^{かつとう}が身体症状としてあらわれやすいのです。

身体疾患か心因性のものかすぐには診断できない場面もありますが、背景に不安ストレスなどを抱えている場合は、それらが解消されない限り、一時的に症状がおさまっても、別の症状がでることがあります。

Q3 ギターを買ってくれば

最初に一度買ってやったのがいけなかったのですが、「ギターを買ってくれば学校に行く」と次々に要求を出してきました。買ってやると二、三度登校するのですが、また休んでしまいます。

どうしたらいいのでしょうか？

○ 問題の解決方法

子どもとの間で何らかのトラブルが生じたときの三つの解決方法が考えられます。

① 子どもが勝って親が負ける解決方法

この解決方法は、子どもからの要求があると親はぶつぶつ言いながら、最後は子どもの言い分を受け入れてしまう方法です。このような解決方法では、子どもの欲求不満に対する耐性を育てることはできません。イヤなことはやらないで生活していく生き方を学ぶ危険性があります。

② 親が勝って子どもが負ける解決方法

仕方なく親の言うとおりにしますが、子どもはものごとを深く考えなくなり、自主性が育ちにくくなります。

③ 話しあいで解決する。

親の気持ちを子どもに伝えるとともに、子どもの考えや気持ちも大事にしながら問題を解決していくと、子どもは自発性や自主性を身につけていきます。

子どもが登校しなくなると、親は何とかして学校へ行かそうと考えます。しかってみたり、お願いをしたり、時には、条件をつけて物を買ったり与えたりします。親の情として無理からぬこととは思いますが、条件をつけて登校を促しても、すぐにだめになってしまいます。

ただ、学校へ行きさえすればよいと考えるのではなく、「子どもは悩んでいる」ということを理解しようと努力してみることです。

「家族の関係はどうか」「友人関係はどうか」「勉強することを強要しすぎていないか」などなど。

物を要求してきたときは、学校へ行くことと切り離して対応するようにしましょう。「だめ」「少し待たせる」「買ってやる」の三つのうち、今はどれがよいかを、親子で話し合って決めるようにしたいのではないのでしょうか。結論をどうするかよりも、話し合うことに意味があるようです。

Q4 毎晩 起きて

しだいに生活のリズムが崩れ、今では夕方になると起きてきて食事を取り、インターネットやゲームをして明け方に寝るという、昼夜逆転の生活を送っています、学校に行かないですむようにと、そんな生活を送っているのでしょうか？

○ 気が休まる

不登校で家に閉じこもり、家族と口を利かなくなった子どもの一人は、「休んでいるとき、自分が病気と思っていると気が休まる。学校のことや勉強のことを考えなくてもいいし、そのうちにテレビを見たり、漫画を読んだりして、少しでも学校のことを忘れようとした」と言っています。

子どもは心の健康をそこね、自分の存在（居場所）を見失い、自室に閉じこもり、昼夜逆転の生活に逃避^{とうひ}していると考えられます。

○ マイナスの思いこみが強い

人間はプラスの刺激が強いと自信につながるし、マイナスの刺激が強いと不安が強くなります。一般的に不登校の子どもたちはマイナスの働きかけが強いため、不安が高まり登校できなくなります。

マイナスの思いこみの心理が、子どもを追い込んでしまっていると理解して下さい。

○ 長期戦の覚悟で見守る

今、心が不安定になり自分を見失っている状態なので、放っておくのではなく心の支えとなる必要があります。

教育相談の専門家の助言を得ながら、家庭、学校が協力して対応するという姿勢も大切です。

Q5 部屋にかぎをかけて

何とかして登校させようと考え、先生と父親が協力して、強引に車に押し込んで学校に連れていきました。しかし、結局、校舎には入りませんでした。そして、その日から自分の部屋にかぎをかけてとじこもったのです。どうしたらいいのでしょうか？

○ 一人になりたい

ひとつには、親への反抗、いやがらせ、わずらわしさ、登校させられることへの抵抗の手段として、部屋にかぎをかけ閉じこもることがあります。

かぎをかけることによって、目の前の人とのかかわりを避け、自分の中でふくれ上がった憎しみや恐れから、閉鎖的、孤立的になりがちです。いわゆる心にもかぎをかけて、とじこもうとします。

○ どうかかわればいいのでしょうか

子どもの状態を細かくチェックし、理解しましょう。そして、子どもの気持ちに働きかけましょう。子どもは「ほっといてほしいけど、見放されるのはイヤ」と強く思っています。矛盾した気持ちを持っていますが、親がこの心にはたらきかけてこそ、心を開いて信頼しあえる状態が生まれるのでしょうか。

子どもが感じているであろう気持ちを、素直に伝えることです。言い訳や説教も励ましも必要ありません。「悔しくてたまらないんだろうね」「だれにも会いたくない気持ちなんだね」など、これらはテクニックではなく心です。



Q6 母親に乱暴を

家から一歩もでなくなるところから、母親に対する暴力がひどくなってきました。少しでも気に入らないことがあると、当たり散らします。母親は子どもの気配を感じると「また暴力をふるわれるのでは…」と考えてゾッとします。どうしたらいいのでしょうか？

○ 乱暴は心に何かが起こっていることを告げる信号

子どもの異常な行動は、心に何かが起こっていることを知らせる信号です。乱暴するにはそれなりの意味があり、また、刺激があつての反応です。多くの場合、登校を促す言動が引き金になっています。乱暴がひどくなると、その行為にのみ目がいき、どうにかして乱暴を抑えようと考えますが、そうでもしないとられない子どもに注目し、何かを訴えていることをキャッチし、親子関係の中で見つめ直していくことが大切です。

○ 保護者としての態度

次のような態度がとれる親になることも必要でしょう。

① 登校を促す刺激を控える親に

登校の刺激をしないと学校のことを忘れるのではないかと考えがちですが、子どもたちは決して学校のことは忘れてはいません。

親が「学校に行かさなければ」という考えから開放されることが先です。

② おどおど、おろおろしない親に

子どもに対しては、一貫して毅然とした態度きぜんが大切です。変に我慢することはありません。また、ご機嫌取りは逆効果です。

③ 承知の上での乱暴だと受け止める親に

第三者がそばにいる場合や、相手の反応などで十分コントロールしますから、あくまで承知の上での行動です。

④ あせらずに、そして孤立しない親に

乱暴しないようにと願うのではなく、乱暴しない子どもになるのを待つことが大切です。学校の担任・スクールカウンセラーや関係機関に相談して、保護者自身の不安も解消しながら、応じていきましょう。あせってはいけません。

Q7 いつまで続くのでしょうか

子どもが学校を休み始めてから、もう半年も過ぎました。毎日、子どもと顔をあわせていると、「今ごろ、お友だちは皆、勉強しているのに」と考えて情けなくなります。こんな状態が続くと、私がノイローゼになってしまいそうです。いつまで続くのでしょうか？

○ 不登校と家族の状態

子どもが学校に行かなくなって半年も過ぎると、子どもがすでに学校へ無関心でいるように見えてあせりがでてきます。いつになれば、この暗いトンネルから抜けられるのか見通しがたたなくて、大変不安な気持ちになると思います。

○ 不登校状態の理解

一人でテレビゲームやテレビに夢中になっているときには、比較的安定し、自分の生活を自分で主体的に過ごしているといえます。刺激の少ない自室にこもって、本当の自分と対面して、主体的に行動できる状態をかみしめているのでしょう。子どもの成長にとって主体的に行動できる心が育っていることは大変重要なことです。

○ 解決への視点

不登校状態が続く子どもへの解決への視点として、主体的・自発的な行動を確かにとらせることが大切です。

そのポイントとして

- ① 規則正しい生活。特に起床時間と就寝時間がどれだけ自己管理できるようになっているか。
- ② 身の周りの整理ができていますか。
- ③ 親に対して安定した気持ちで接するようになっているか。
- ④ 自分の気持ちが素直に表現できるようになっているか。
- ⑤ 生産的な活動（絵を描く、工作をする、読書をする）など新しいことへの取り組みができるようになっているか。
- ⑥ 家から抵抗なく出かけられるようになっているか（近所の本屋、スーパーなどへ）。身近な人への接触ができるようになっているか。

○ 再登校の見通し

子どもの心が成熟していくのをじっくり待ちましょう。あせると子どもの様子が見えにくくなり、かかわり方も一方的になってしまっただけでかえってマイナスになります。

不登校の子どもにとっての甘えとは

不登校の子どもたちの大きな特徴は、家を唯一の避難場所としていることです。だからといって、家が完全に安らぎの場になっているとは限りません。学校のことが絶えず心のどこかにひっかかっているし、また、親の目を絶えず背中に感じているからです。

その一つが「甘え」です。甘えることによって、不安や緊張から逃れ、安らぎを求めようとします。まるで、幼児のように母親にまとわりついたり、母親の外出を極度に嫌って、泣きながら哀願したりもします。不登校生にとって「甘え」は救援の信号です。

甘えの行動は、急にくることが多いので、母親としては不安になる以上に気味が悪いと言った方が実感でしょう。ところが、子どもにしてみれば、行動こそ突然に見えますが、ここまで至るには大変つらい思いの道程があるわけです。そこから解放されたいわけです。

子どもの自我の弱さや養育期の親子関係を無視することはできません。幼児に返ったような行動は、過去に十分満足を得た状態をごく自然に再現しようとするものです。

親として注意しなければならないことは、つい甘えの現象のみに目がいてしまうことです。甘えなければいけない子どもの気持ちを受け止めるところから出発しないと根本的な解決にはなりません。

子どもは敏感です。子どもが母親に求めているのは、知識や技術ではなく、ありのままを感じとってくれる母親自身の態度です。

「甘えは精神的離乳の始まり」と考えて、あらためて自分で考え、自分で決め、自分で行動できる子どもに育てることをめざしましょう。

IV 家族の役割

家族というものは、社会と密接な繋がり^{つな}を保ちながら成り立っている一番小さな社会集団であり、私たちは知らず知らずにその中からさまざまな影響を受け、社会の一員として成長しています。

また、家族は大人だけでなく、子どもにとっても「憩いの場」として情緒の安定が図られる重要な集団でもあるのです。

子どもが心身共に健やかな成長をしていくためにも、家族がこれらの役割を十分に発揮していくことが望まれ、そのためにも保護者としての責任ある考え方や行動が強く求められているのです。

1 すること・しないこと

子どもの成長を考える上で、家族全体が子どもに対してどのように成長してほしいのか、そのためには保護者として何をしなければならないのか、何をしてはいけないのかという共通の意識を持つことが大切です。

そのためにも、家族全体で子育てについて十分な話しあいを持つことが必要ではないでしょうか。

子どもの抱えている問題の本質は簡単に理解できるものばかりとは限りません。早急な解決を求めるあまり、過激なはたらきかけによってかえって子どもの状態を悪化させることのないように心がけましょう。



Q 不登校の子どもがいるのですが、親として子どもと一緒にいてあげた方がいいのでしょうか。

- 不登校で悩み苦しんでいるわが子を見て、今までの子育ての反省から、何かをしてあげなければわが子に申し訳ないという気持ちは、大変尊いものであると思います。

しかし、子どものために、例えば仕事を辞めて一緒に家に居ても、それは決して子どもの幸せに繋^{つな}がるとは限りません。何かを犠牲にして、無理に子どもに寄り添うことはかえって失敗を招く場合さえあります。「こんなにまでしてあげているのに…」そのような親の態度が見えたとき、それは子どもにとって大きな負担となります。

さしさわりのない程度で、子どもと居る時間を今まで以上に大切にし、ありのままの子どもを受け入れることのできる存在であってほしいと思います。

Q 不登校になって、家でテレビゲームばかりしています。何も考えていないように見えるのですがどうしたらよいのでしょうか。

- 子どもが学校にも行かず、家で何時間もテレビゲームをしている姿を見てみると、いらだつとともに、どうしてそんなに面白いのかと思うかもしれません。

しかし、子どもの本心は、「面白いからやっているのではないよ。学校のことを忘れることができるからしているのだよ」というものかもしれません。

そのような子どもにとっては、テレビゲームは、何も考えないための手段であり、自分を守る道具なのです。

子ども自身も悩み続けているのです。一般的な子どもの姿があって、それと比べて何か情けなくなる気持ちは分かりますが、あせらず、あわてず、あきらめず、子どもと一緒に楽しめるものを発見してほしいと思います。

そのような関係が安定してくると、きっと子どもの将来によい影響を及ぼすのではないのでしょうか。

2 「母性性」と「父性性」の歯車

子育てには、子どもをかけがえのない存在として育てていこうとする優しさ「母性性」と、子どもをその個性に応じて可能性を鍛え伸ばす厳しさ「父性性」が必要です。これらは、人間の成長にとって片方のみでは不完全であり、互いに補ってこそ有効なものとなりますが、なかなかそのバランス関係が難しく、場合によっては、どちらか一方の役割が他方を押しのけたり、抑制したり無視したりすることがあります。

「母性性」と「父性性」の歯車がうまくかみ合ってこそ、子どもは安定し信頼が生まれ、それによって子どもの成長が期待されるのではないのでしょうか。

Q 不登校の子を持つ父親として、わが子に対する接し方について気をつけなければならないことを教えてください。

- 一般的に父親は母親に比べ、学校の様子を理解する機会に恵まれていない場合が多いようです。

このようなとき、学校へ行けないことを怠けているとしか考えず、なぜ子どもが苦しんでいるかわからず、子どもをしかったり、子どもをしかることでできない母親を責めたりします。そして、苦しみ悩んでいる子どもの話を聞こうともせず、表面的な強さとたくましさを求め、何か厳しく言わなければという気持ちになります。

しかし、必ずしも複雑な内面を持つ思春期の子どもの状況から考えてみても、このような方法が不登校の改善に役立つとは限りません。むしろ、父親の何げない姿から、子どもは何かを吸収していく場合が多いようです。

「何を言うのか」ということより、「どのようにかかわるのか」ということが大切ではないのでしょうか。一見頑固に見える父親が、母親と協力しながら、子どもを理解するためにそばに寄り添いかかわっていこうとする姿は、子どもにとって、新たな父親の発見となり、大きな支えとなるのではないのでしょうか。

3 愛情のかたより

きょうだいのいる家庭では、きょうだいは互いの成長の中から、他人と分かち合うこと、協調すること、競争心を抑制することなど様々な人とのつきあい方を学び合います。また、悲しみや喜びを共有することの大切さも体感します。

親はわが子を同じように育てていると思っています。ところが、子どもの目から見れば平等な扱いを受けているとはとらえていないときもあります。子どもから「えこひいき」という言葉を耳にするようなとき、親として心を痛めるものです。しかし、子どもの言い分をじっくりと聞いてみると、意外なことに気がつく場合があります。子どもからの訴えに対して、親のゆったりと受け止める姿勢によって、子ども自身が、自然ときょうだいの違いや、自分の個性に気づき始めるかもしれません。

Q きょうだいがいるのですが、兄が不登校になっています。弟に比べ兄に対してはどうしても気をつかってしまいます。これでいいのでしょうか。

不登校の子どもは、外面的にはどのような態度や行動を示そうとも、強い愛情欲求を持っているものです。これまでの成長の過程で、自分は弟に比べて愛情を受けていなかったと思い込んでいる場合、たとえば、弟が親に甘えていると、兄の心の中に抑えきれない愛情欲求がゆさぶられ、嫉妬^{しつと}の目で親の姿を見つめることになるでしょう。

このような場合、兄の心を傷つけてはいけないと思って、何も言葉をかけないでそのままにしていると、かえって事態の悪化を招く場合が一時的に起こることがあります。

ここで大切なことは、表面的には「愛情は不要」という態度を示している兄の本心は違うのだという思いを持ちながら、親としては迷うことなく、「どちらの子も愛しているんだ」という態度を示し続けることだと思います。このような態度によって、やがて親の愛情が真実のもののか、虚偽のもののか、兄にもわかってくるのではないのでしょうか。

4 耳をすませば

「親子」のコミュニケーションが大切だと言われています。子どもが何かトラブルを起こした場合、重要なことは、じっくりと子どもの言い分を聞くことです。それによって子どもは、家庭が自分にとって安心できる「心の居場所」なのだとということを感じ取り、子どもに安心感を持たせることができるのです。

進路や勉強のことなど、子どもに対して言いたいことは山ほどあると思いますが、子どもは自分の心の動きを把握し、それを相手に表現することが苦手なのです。子どもの考えを無視し、早急な結論を出してしまうと、子どもはもう自分は何を言っても無駄であると感じ取ってしまいます。まずは、子どもの言い分を耳をすまして聞くことに徹し、子どもの気持ちを理解しましょう。

Q 子どもとの話しあいを受け身の立場で聞いてやろうと思うのですが、注意することがあれば教えてください。

- 子どもの話を聞く場合、最も基本的なことは「相手の言葉のリピート（オウム返し）」の態度です。子どもが自分の気持ちやからだの具合などについて訴えてきた場合は、このリピートで接してみてもいいのでしょうか。この場合、必ず主語として「あなたは」「〇〇ちゃんは」など、子どもの呼称をつけるとともに、「今は」という時間の限定をして、相手の言葉の反復をこちらがするようにしましょう。子ども自身の訴えが親に伝わることの^{あんど}安堵感とともに、自分の言葉を相手から聞くことによって、時間の経過とともに、自分自身を振り返らせる機会となるかもしれません。

ここで注意してほしいのは、親自身がいたたまれなくなっていて、「とにかく学校へ行きなさい」と、今までとは異なった態度に出てしまうことです。

「だけどなあ…」「でもね」など、保護者の意見の押しつけにならないよう、リピートで子どもの話を受け止めて、いつも共感的な態度で子どもの話を聞くようにしましょう。

5 ふりむけば

近年、核家族化の進む中、祖父母など子育てについては相談に乗ってくれる人や子育ての知恵を授けてくれる人が少なくなり、また、少子化や都市化によって、隣近所で子育ての情報をかわす機会も減り、母親の中には、不安な状態で子どもの成長にかかわってきた人もいるのではないのでしょうか。

困ったとき、ふりむけば誰も相談する相手がいない、そんな孤独な心境では決して健全な子どもの成長は望めません。

複雑な子どもの問題は、家族だけ、あるいは学校だけではなかなか解決できるものではありません。狭い人間関係の中だけで悩んでいても際限なくその悩みが深まってしまうことが多いものです。

県下には、様々な子どもの問題について相談に乗ってくれる機関があります。相談することによって意外とそこに解決の糸口が見つかるかも知れません。また、相談機関を中心に保護者同士のネットワークをつくっているところもあります。自分一人で悩まず、遠慮なく相談してみてもいいのでしょうか。



V 家庭と学校の信頼関係

1 学校との連携

文部科学省の調査結果などをみますと、不登校の直接のきっかけは、学校や家庭だけの原因とはいえず、学校・家庭・地域のさまざまな要因が複雑に絡み合っていることが考えられます。

様々な分析から不登校の原因・背景を考えると、

- ◇ 家庭における幼少期からのしつけの問題
- ◇ 学校の在り方
- ◇ 生活体験の不足や、物質的な豊かさの中での他人への思いやりや、人間相互の連帯感の希薄化などの社会状況などが指摘されています。

そのため、家庭・学校・関係機関の三者があらゆる機会に緊密な連携を図りながら取り組むと、不登校の子どもについてかなりの部分が改善されたり、解決されたりするでしょう。

家庭・学校・地域社会が連携をとり、信頼関係を築くためには、それぞれの役割を果たすことが大切です。もしも、勝手にそれぞれの思いで子どもにかかわると、子どもは混乱したりストレスを感じたりすることがあるのです。

「子どもの健やかな成長」という共通の願いを持つ三者が、緊密に連絡をとりながら、お互いの信頼関係を築き上げることが大切なのです。



2 学校との協力関係

不登校など子どもの心の問題に関しては、家庭と学校がどの程度協力していけるかが重要なポイントです。家庭と学校とが信頼関係を保ちつつ、息のあった連携がとれるようになれば、子どもの心理的負担はずいぶん軽減され、行動の変容が期待されると言われています。家庭と学校が、日ごろからお互いにコミュニケーションを図ることは、信頼関係を築く上で大切なことです。

(1) 関係を絶やさないこと

「学校に行かない」という子どもの心の中には、「学校はどんなんだろう」という気持ちが働いています。もし、学校との連絡が途絶えがちになると「先生や学校から見捨てられた」という気持ちが大変強くなります。学校に行っていなくても気持ちの上で学校とつながっていたいという思いは、学校に行っていないだけになお一層強いものがあるのです。

子どもは、教師の家庭訪問を拒否したり、学校よりも他の教育相談機関に依存する時期もありますが、そんなときにも、子どもの家での様子や学校の様子を電話などで連絡をとり、「学校と一緒に考えている」姿勢を見せることも大切でしょう。

学校ときめ細かく連絡をとりあうことで、心に余裕が持て、子どもへの対応に確信が持てるようになります。そうした保護者の心の安定は、子どもに安心感を与え、子どもの立ち直りを早めることにつながります。

(2) 情報の提供・交換

もし、子どもが不登校の様子を見せだしたときは、家庭にとって最も気軽に連絡できる方法を学校と相談して決めましょう。電話とか、直接話しにくいことは連絡帳を利用するなどの方法もあります。

また、学校からの情報も、学級・学年通信などで知っておくとよいでしょう。まず、保護者が学校の行事や取り組みを知り、子どもが望めば、教えることもできます。

不登校の子どもの状態や原因は、一人一人異なります。日ごろから、学校との情報交換や、率直な意見交換をこまめに行いましょう。

(3) とともに歩む

不登校の初期の段階では、保護者は気持ちが動転し、強く心を痛めるのも事実です。そして、不登校になった原因を探しだそうとあせるときもあります。

しかし、大切なことは、原因を探しその理由を追求することにより、保護者と学校が緊密な連絡をとり、お互いができること、できないことなどを話し合い、「どうすれば、この子の悩みを解消することができるのか」と、ともに考え、ともに歩むことなのです。

(4) ゆとりを持って

保護者や学校が何かが何でも登校させようとする、それが子どもにとってプレッシャーとなり、かえって状態を悪化させてしまうケースもあります。

中学生の時期は、心身ともに急速な発達を遂げようとするときです。親の気持ちも痛いほどわかっているのですが、行動が伴わないこともあるのです。それだけに、その気持ちに応えられない自分自身に対し、いらだちを覚えることもあるのです。

不登校になった子どもにとって大切なことは、単に学校に再登校できるようになることではなく、その子が不登校を克服する過程でどのような力を身に付け、いかに成長を遂げるかということでしょう。

不登校は、心の成長の助走期ととらえ、周囲の人間がゆとりをもって対応することが大切なのです。



Ⅵ 相談について

1 相談しましょう

Q 不登校のわが子について関係機関などに相談しようと思うのですが、保護者としてどのようなことを心がけていけばよいのでしょうか。

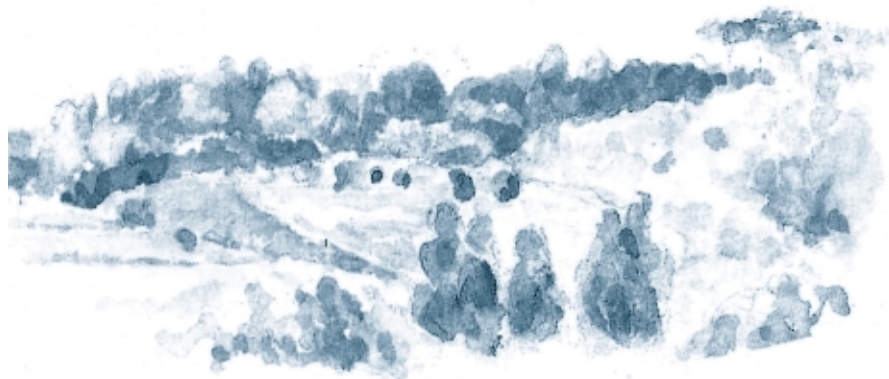
- 子どもの状態が不安定な時ほど、保護者としては自分の人生経験の中でなかったことだけに、どうすればいいか悩む場合があります。

そのような時は、まずは学校の先生に相談してみてください。先生は今まで数多くの子どもたちと接しているので、経験からわが子をどのように感じているのかということを聞き、一つの目安にしてみてもはどうでしょうか。

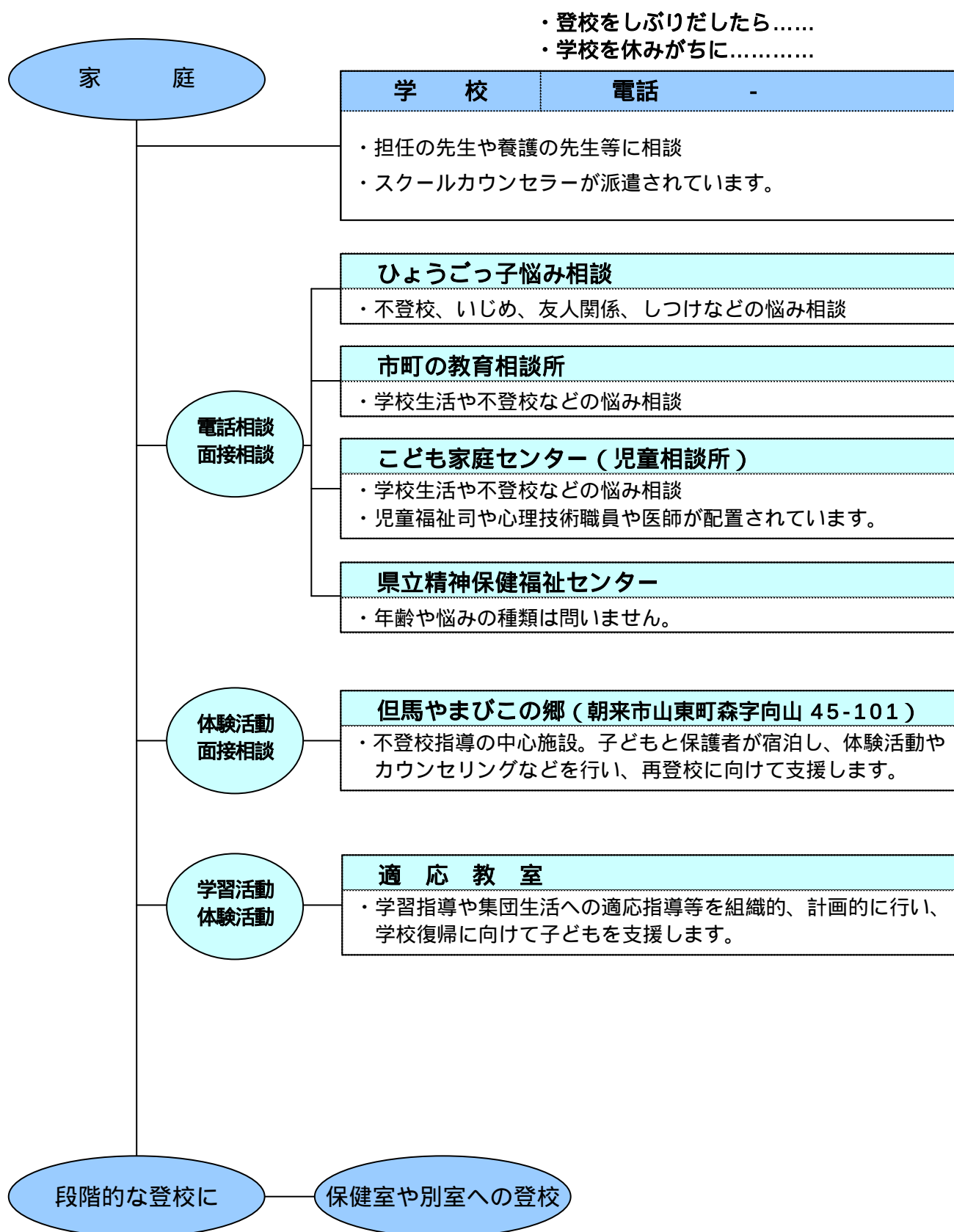
不登校の原因などについては、様々な要因が複雑に絡み合っていることが多く、家庭と学校だけでは解決できない場合もあります。

状況によっては、学校から相談機関や専門家を紹介してもらい、専門機関とも連携して、子どもの心の居場所を見つけることも必要でしょう。

また、専門機関などに相談に行く場合、保護者なりの資料を準備してみてもどうでしょうか。例えば、子どもが不登校になったときの言動、保護者にどのように訴えてきたか、保護者はどのように応じたか、それに対する子どもの反応はどうであったか、これまでの子どもの変化、生活歴、相談歴など最近の本人の生活状況をまとめておいて相談すると、よりの確な支援を受けることができると思います。



2 相談はどこでできますか？



(平成23年12月現在)

○ひょうごっ子悩み(いじめ)相談 (ひょうごっ子悩み相談センター内) 電話受付 0120-783-111 (携帯電話からは) 0795-42-6004 電話相談 毎日 9:00~21:00 面接相談 予約制 9:00~17:00 ○夜間教育相談窓口 電話番号 0795-42-6559 電話相談 毎日 21:00~翌 9:00	各分室等(受付 月~金 9:00~17:00) 阪神教育事務所分室 0798-23-2120 宝塚教育振興室分室 0797-85-6546 播磨東教育事務所分室 079-421-0115 加東教育振興室分室 0795-43-0065 播磨西教育事務所分室 079-224-1152 光都教育振興室分室 0791-58-2326 但馬教育事務所分室 0796-24-1520 丹波教育事務所分室 079-552-6059 淡路教育事務所分室 0799-22-4152 (神戸市内) 神戸教育総合センター 教育相談指導室 0120-790-783
---	--

各市町に相談窓口

神戸市こども家庭センター 078-382-2525	姫路こども家庭センター 079-297-1261
西宮こども家庭センター 0798-71-4670	豊岡こども家庭センター 0796-22-4314
尼崎市(障害相談) 06-6423-0801	中央こども家庭センター洲本分室
川西こども家庭センター 072-756-6633	0799-26-2075
中央こども家庭センター 078-923-9966	川西こども家庭センター丹波分室
	0795-73-3866

電話相談 078-252-4987 月~金 9:30~11:30、13:30~15:30
面接相談(予約) 078-252-4980 月~金 午前中

電話相談 079-676-4724 月~金 9:00~17:00
面接相談 (来所相談) 月~金 9:00~17:00

市 町 名	教 室 名	電 話	市 町 名	教 室 名	電 話
神戸市	くすのき教室	078-341-0888	加西市	ふれあいホーム	0790-42-3723
	みなと分室	078-341-0888	加東市	ふきのとう	0795-42-3158
	ひがし分室	078-431-5998	多可町	ほのぼの教室	0795-32-2385
	きた分室	078-594-1633	姫路市	ふれあい	079-224-5843
	ほくしん分室	078-987-3109	神河町	ユース	0790-34-0030
	ながた分室	078-579-0806	市川町	どんぐり教室	0790-26-1010
	きたすま分室	078-793-5422	福崎町	のぞみ教室	閉鎖中
	たるみ分室	078-707-4069	相生市	コスモス教室	0791-24-2118
	にし分室	078-991-6446	赤穂市	ふれあい教室	0791-43-7851
尼崎市	はつらつ学級	06-6436-0176	たつの市	赤とんぼの里"やすらぎの部屋"	0791-63-4373
西宮市	あすなろ学級	0798-67-6860		ゆうあい教室	079-322-1364
芦屋市	のびのび学級	0797-23-8567		すずめの学級	0791-72-6577
伊丹市	やまびこ館	072-783-0810	宍粟市	さつき学級	0790-63-3751
	学習支援室	072-780-2480	佐用町	ほっとルーム	0790-86-1211
宝塚市	Palたからづか	0797-87-7129	豊岡市	ふれあいセンター	0796-24-8303
川西市	青少年の家「セオリア」	072-757-8080	香美町	教育相談センター	0796-36-3850
三田市	あすなろ教室	079-559-1868	養父市	子どもサポート教室	079-664-1627
猪名川町	STEPIながわ	072-765-2065	篠山市	ゆめハウス	079-590-8111
明石市	もくせい教室	078-918-5096	丹波市	レインボー教室	0795-72-1200
加古川市	わかば教室	079-421-5484	洲本市	びゅーばる	0799-22-4547
高砂市	のびのび教室	079-443-0115	南あわじ市	三原適応教室	0799-43-5021
稲美町	ふれあい教室	079-492-9149		緑適応教室	0799-44-3001
播磨町	ふれあいルーム	079-437-4141		西淡適応教室	0799-36-5960
西脇市	はればれ教室	0795-22-8080		南淡適応教室	0799-50-3031
三木市	みつきいルーム	0794-83-2020	淡路市	淡路市立青少年センター	0799-86-0244
小野市	みらい	0794-63-4175		淡路市立青少年センター北淡分校	0799-82-1144

3 相談機関一覧（平成23年12月現在）

（1）ひょうごっ子悩み相談センター

名 称	電話番号	住 所	時 間
ひょうごっ子 悩み(いじめ)相談 (電話・面接)	(電話・フリーダイヤル) 0120-783-111	加東市山国 2006-107	電話相談・毎日 9:00～21:00 面接相談・予約制 9:00～17:00

（2）夜間教育相談窓口

電話相談	毎日 21:00～翌9:00
電話番号	0795-42-6559

（3）各地域の相談機関（曜日：月～金 時間 9:00～17:00）

【神戸】

神戸市立総合教育センター 教育相談指導室	(電話相談) 0120-790-783 078-360-3152 078-360-3153 (面接予約) 078-360-3150 078-360-3151 神戸市内に限る
神戸市立青少年センター	078-341-0888 078-341-0889
東教育相談所 北教育相談所 北神教育相談所 長田教育相談所 北須磨教育相談所 垂水教育相談所 西教育相談所	078-431-5998 078-594-1633 078-987-3109 078-579-0806 078-793-5422 078-707-4069 078-991-6446
特別支援教育課教育相談室	078-371-3771
こうべ学びの支援センター	078-360-2160
神戸市こども家庭センター	078-382-2525

【阪神】

ひょうごっ子悩み相談センター 阪神教育事務所分室	0798-23-2120
尼崎市立教育総合センター	(電話相談) 06-6429-7564 (面接相談) 06-6423-2550
西宮市スクーリングサポートセンター 西宮市教育委員会青少年相談室 青少年電話相談	0798-67-6860 0798-22-8080
芦屋市立青少年愛護センター 芦屋市立カウンセリングセンター	0797-31-8229 0797-23-5998
西宮こども家庭センター	0798-71-4670

【宝塚】

ひょうごっ子悩み相談センター 宝塚教育振興室分室	0797-85-6546
伊丹市立少年愛護センター 伊丹市立総合教育センター 宝塚市青少年センター 宝塚市立教育総合センター 宝塚市子ども家庭なんでも相談 川西市教育情報センター 三田市青少年育成センター 猪名川町教育研究所	072-770-8742 072-772-6171 0797-84-0947 0797-87-1718 0797-77-9111 072-758-7830 079-563-1110 072-765-2065
川西こども家庭センター	072-756-6633

【播磨東】

ひょうごっ子悩み相談センター 播磨東教育事務所分室	079-421-0115
明石市教育委員会いじめ対策課 青少年育成センター	078-918-5410
加古川市教育委員会青少年育成課 教育相談センター	079-421-5484 079-421-5733
加古川市教育委員会青少年育成課 少年愛護センター	079-423-3848
高砂市教育相談	079-442-7049
高砂市青少年補導センター	079-443-6246
稲美町教育委員会	079-492-9149
播磨町子どもの悩み相談室	079-437-4141
中央こども家庭センター	078-923-9966

【播磨西】

ひょうごっ子悩み相談センター 播磨西教育事務所分室	079-224-1152
姫路っ子悩み相談 姫路市立総合教育センター育成支援課	0120-7830-28 079-224-5843
神崎郡青少年補導センター	0790-26-1010 (内線611)
神河町教育委員会	0790-34-0212
市川町教育委員会	0790-26-1010 (内線401)
福崎町教育委員会	0790-22-0560 (内線252)
姫路こども家庭センター	079-297-1261

【加東】

ひょうごっ子悩み相談センター 加東教育振興室分室	0795-43-0065
西脇市青少年センター	0795-22-8080
三木市立教育センター	0794-82-8686
ONOひまわりほっとライン	0794-62-4110
加西市立総合教育センター	0790-42-3730
加東市青少年センター	0795-48-3655
多可町青少年育成センター	0795-32-3423
中央こども家庭センター	078-923-9966

【光都】

ひょうごっ子悩み相談センター 光都教育振興室分室	0791-58-2326
相生市青少年育成センター	0791-23-5070
たつの市教育委員会	0791-72-6493
太子町教育委員会	079-277-1016
揖龍青少年育成センター	0791-62-1762
赤穂市青少年育成センター	0120-783-115
上郡町青少年育成センター	0791-52-5500
佐用町教育委員会	0790-82-2424
播磨高原広域事務組合教育委員会	0791-58-0435
姫路こども家庭センター	079-297-1261

【但馬】

ひょうごっ子悩み相談センター 但馬教育事務所分室	0796-24-1520
豊岡市教育相談室	0796-22-5110
養父市教育相談	079-664-1627
あさごっ子悩み相談センター	079-677-2115
香美町教育相談センター	0796-36-3850
新温泉町子どもホットライン	0120-415-279
豊岡こども家庭センター	0796-22-4314

【丹波】

ひょうごっ子悩み相談センター 丹波教育事務所分室	079-552-6059
丹波市教育委員会教育相談室	0795-73-0866
丹波市教育委員会家庭児童相談室	0795-70-0816
篠山市青少年育成センター	0120-711-338
篠山市教育委員会家庭児童相談室	079-552-1115
川西こども家庭センター丹波分室	0795-73-3866

【淡路】

ひょうごっ子悩み相談センター 淡路教育事務所分室	0799-22-4152
洲本市立青少年センター	0799-22-4547
南あわじ市青少年育成センター	0799-37-3026
淡路市立青少年センター	0799-62-3300
中央こども家庭センター洲本分室	0799-26-2075

(4) 宿泊体験施設

県立但馬やまびこの郷	TEL 079-676-4724
------------	------------------

児童生徒や保護者がともに宿泊し、野外活動や専門家によるカウンセリングなどを実施することにより、再登校に向けて児童生徒、保護者や教員等を支援します。

さし絵

前田 勝美

「希望への一歩」

作 成 兵 庫 県 教 育 委 員 会

神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

